
真・悪役†無双

レールガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・悪役＋無双

【Nコード】

N4979S

【作者名】

レールガン

【あらすじ】

少年は目を付けられた。国の脅威となる存在になるために。――

更新凄い遅い予定です。完結ビジョンがないので、矛盾うまれるかもしれません。だめ出し、誤字脱字訂正、感想、あればお願いします。

1

俺に名前はない。

生まれてからずっと、スラム街と呼ばれる地区で育っていた。

ある日どこかの軍に拾われ、人間兵器の1人として過酷な訓練を受け、戦争に出されるようになっていった。

1年の間に何ヶ所も戦場を、転々とし全て生き帰ることができた。この頃から、人間と言われる感情はほぼなくなっていたと言っても良かった。

1年も過ぎると、部下をもち戦場にでた。

部下と言っても戦争の指揮をとったり、策を弄したりしながら戦うためのものではなく、常に自分が先頭に立ち奮い立たせたり、敵前逃亡を防ぐまたはしたものを捕縛・破壊する。

所謂ただの監視役兼子守、とでも言えはいいのだろうか？

十単位で子供達（軍から戦争に送られてくる自分と同じような人間兵器）は来る。

皆一様にして、目に光はなくただ殺す為だけにここにいる。稀に敵の重火器に恐れる者もでるが、そんな奴は皆無視する。

1人でも多く殺せば、その分報酬は出る。（正規軍に比べて雀の涙ほどであるが、知る由もないのだが）

なので大体が任されたエリア内ではあるが、自分達で行動している。

それからこんな生活が、数年続いていた。

この数年で全く変わったことと言えば、本を読ませて貰えたこと。

施設内には図書室などあるわけがないが、ある年数生き長らえた子供には兵法書と呼ばれるものが与えられ、ナンバーが付与されるらしい。

俺は、ナンバー05だった。

しかし、現存しているナンバー持ちは俺を含め3人しかいないそうだ。

他、2名は死んだのか失踪なのかよくわからないが、軍はどうでも良いようだ。

ナンバー持ちの役目は戦争の指揮監及び子供の育成である。

指揮のために兵法書が渡される、というわけである。

子供の育成はかなり難しい。少し力をいれると壊してしまうし、力をいれないと何もしない。

しかし、壊して、壊して、それでも生き残った奴を基本使う考えらしく、途中からは無関心で進めていった。

それから1年後、運命の出会いが訪れた。

2

side 于吉・左慈

「まんまと、やられてしまったようですね」

そう于吉は、苦言を漏らす。

しかし、その顔には笑みが張り付いている。

「くそっ！忌々しい。貂蟬に邪魔をされ、北郷を殺すどころか醜態をさらし、挙げ句外史は終末を迎えてしまった」

「まあ、しょうがないでしょう。それよりも次は2年後また、機会が訪れます。その時こそ宿願を果たしましょう」

そう言いながら左慈にしなだれかかる。が、ひらりとかわされてしまう。

「だが、また貂蟬に邪魔をされないとも限らない。なにか考えがあるのか？」

「ありますよ。北郷一刀と同じ世界の人間を連れてきて殺させます。」

「だが！奴の世界の軟弱なやつを連れて来たところで何も意味が無いのではないか？それに、干渉を悟られると同じ結末を迎えてしまうかもしれないのだぞ。」

疑問、訴えも最もなことであるが、2人の考えに差異があるのか微笑しながら肩を竦めて問題は無いことを告げる。

「大丈夫だ。最初の疑問だが、目をつけたやつは同じ世界の住人ではあるが戦闘能力も高く殺人に躊躇いのない人間だ」

一息ついて、相方が今のところに疑問がないことを確認しまた口を開く。

「次に干渉については此方が手を出さなければ向こうも何をする気もないらしい。私達が干渉を決め込んでいる限り不具合はない。私兵が出せないのは厳しいがコイツに任せよう。」

保険は掛けられるだけ、やってはおくが。と付け足す。

何故、約も取り付けてすらいはないはずなのに自信に満ちているか甚だ疑問なのだが、恐らく見込みあつての事なのだろう。

「分かった、任せる」

「はい。では、あの子をここに連れて来て下さいね。」

「……何故だ」

「適材適所というではないですか。それに、彼の実力を計るのにも丁度良いですよ？」

どうせ、彼の力信じてないんだろうし。と小さく呟く

「ああ分かった。弱すぎて殺してしまっても、文句はつけるなよ」

そう、言い残し消えて行く。

「まあ、万が一にでもないことですがその時はまた今まで通りですがね……」

しかし、その眩きはだれにも届きはしなかった。

3

この日も、戦場に来ていた。

万事優勢に進めており、あと1月でもすれば制圧出来るだろうと考えていた。

夜、不思議な気配を感知しそれをたどり森に入ってしまった。

気配をよむ能力に関しては、戦うこと以上に長けていると思っていたが、今回は虚ろな気配しか感じとれない。

相手に殺気がなければ、注意しなければわからないことだってあるが、今回ののは毛色が違う。

明らかに一個人に挑発してきている。気配を隠す気がないのだが、わかりにくく克つ、ピンポイントで殺気を飛ばしてきている。

これだけのことが出来るのだから相当強いだろう。しかし、強いからなんなのか、そんな思考など持ち合わせていない。

喧嘩を売ってきた敵を排除することしか考えていない。

急に殺気がつよくなった。

”ビュッ”という風切り音と同時に回避行動を取る。

完全な不意打ち。しかし、決して無様な避けかたではなく、半歩体を引き、迎撃を繰り出すまでを1動作にした行動は流石に数多の戦場を生き抜いて来ただけのことはあるのか。

「……………」

”敵”は何も話さない。別に此方も何故狙う？何故いきなり？等と聞くつもりもないし興味すらない。

「行くぞ、死ね」

それだけを発し”敵”に向かっていく。言葉を発したのは、偶々ではあるが空気がそうさせた。

基本戦場では、自分より強い”人間”はいない。重火器など当たれば死んでしまうが、対人で遅れを取るつもりもない。

まして1対1で苦戦する、等未経験である。

だからと言って慢心するわけでない。ただ、今相対している相手の強さを瞬時に理解した。故の発言だったのかもしれない。

猛然と距離を詰め、何の虚もなしに正拳突きを放つ。

正拳突き等、空手の初歩的な技。少しかじれば誰でも繰り出すことは出来るだろう。

普通なら避けられる。しかし、今放っているのは並みの達人・師範等到底及ぶところではないスピードとパワーが乗っている。

故に”虚”等必要ない、最初に教わるような技こそ必殺技に成り得るのだ。

予想以上の手応えと共に”敵”は吹っ飛び、木に当たり止まる。普通なら起き上がれない倒れかたをしたはずであるのに、何食わぬ顔で立ち上がる。

「ふん、良い攻撃だな。あいつが選ぶ理由が分かった気がする」

立ち上がり、いきなり話し掛けてくる。

「あいつ？」

何時もなら気にもなら無い、どうでも良いことの筈なのだが、さつきから何故だか言葉を多く発してしまう。

「お喋りはここまでだ。もう少しだけ付き合ってもらおうか。」

相手は言うが早いか、突っ込んでくる。

恐らくスピードでも、パワーでも此方が上である。相手の攻撃起動は見えているし、一撃の重みも其処まで感じない。

蹴りを去なし、懐に入り腹部に掌底を見舞う。今回は手応えがない。飛び退き、力を吸収されたのだろう。

さつきとは違い、人体の脆い場所顎や肋骨など無手で壊しやすい場所を破壊して行く戦法を取る。

そのために、”隙” しかも確実に壊すために大きな”隙”を作らなければならぬ。

目の前の相手に出来るだろうか？否、やるしかないのだ。戦場では負けたら死だけなのだから。

まずは、ジャブで牽制。水面蹴りを。暗器——小剣——を投げつける。”隙”は出来る。しかし大した”隙”ではなく決定打には出来ない。

誘うしかないだろう。攻撃を誘う、という行為は一步間違えれば命取りにもなるが、自分の命を大したものと思っていなければそれが強みにもなる。

両者、拳と蹴りの応酬を繰り返していく。その中で極自然に、達人と呼ばれる者からみてもどこが演技かわからないくらい自然に、蹴りを飛び退き避けた着地の瞬間”段差”があり体制が崩れる。

「沈め」

明らかに決めにきている体重の完全に乗っている攻撃。

避ける、ダメージを軽減することすら不可能であろうタイミング。これが、故意のアクシデントでなければ確実に決まっていたはず。

「なに？」

その言葉通り、避けた。綺麗に。最初の攻防のように、完全に。

足元にある剣を相手の足に差し、完全に重心が前にある顔……顎を砕くために打ち抜く

「…………ぐっ…………」

しかし、倒れた、片膝を着いたのは自分自身。何が起きたかわからない。

何もかもが完全な攻撃の筈なのだが…

「今のは危なかったぞ」

何でもないふう言いながら、足の剣を抜きながら話す。

「まあ、合格だ。ついてこい」

「わかった」

色々疑問はあるが、敗者には死だけであり、負けた理由等些細である。

「何故？とか何処に？とか聞かないんだな」

「聞いてもしようがないからな。殺されないだけ有り難い話だ」

そして、2人は暗闇に吸い込まれて行った。

4 (前書き)

夜の電車は凄い。

DSやPCをやってるやつは別に普通。だが、頭の上に花乗っける初春スタイルの奴や、ゴスロリ・メイドそれらは百歩譲って我慢しよう。

しかし、しかしだ！掃除機を素で持ってるやつや、梅酒2？パック持ってるやつってなんなんだよ…。(。∀。；ノ)ノ

「来たか…」

一言呟く。

そこへ、2人が現れる。

最初に口を開いたのは、于吉。

「わたしは、于吉と申し上げます。早速ですが、貴方には北郷一刀を殺して頂きたいのです」

「そんな事でいいのか?…」

人、1人殺す”だけ”至極単純な仕事。しかし、さっきのやつには片膝を着き、一回死んでいるとも取れる。だから、少し慎重になる。

「大丈夫です。その北郷には、戦う力は皆無です。しかし、そいつを守っている者には多少注意が必要になりますよが…」

「了解した。顔を教えてくれ。すぐにでも、殺しに行こう。」

「まあ、焦らないで下さい。先にも言いましたが周りを固めているやつらもいてそんな簡単にいかないのですよ。」

一拍置いて続ける。

「貴方が今から行くのは、三国志の世界。そこに北郷一刀もいます。そこで貴方には三国志の人物になり、北郷一刀を殺すと共に未来の、魏・呉・蜀を潰していただきたいのです。」

「三国志?…曹操や劉備と言った武将が出てくる物語か?」

三国志。

詳しい内容は知らないのだが、確か曹操・劉備・孫権で三国と記憶していた。

「そうです。世に知られる三国志と違うのは、主な武将が殆ど女性になっているところですね」

「…女? そんなやつらが強い?」

いつも行っている戦場でも、女と呼ばれる兵士は少ない。

接近戦になれば一撃で壊れてしまう。

差別しているわけではなかったが、基本的な骨格が違うし、筋肉の付き方も全く違う。

「貴方の世界の男性と女性の力関係が逆転していると考えるのが一番わかりやすいですね」

「そうか」

理解出来たのか、考えるのを諦めたのかとりあえず肯定していた。

「では、本題に入らせてもらいますね。貴方には漢の中枢人物になり実質的な実権を握り、事を進めてもらいます」

中枢人物？しかし、三国志初期なら漢で実権を握れば、動きやすくなるのは確かである。

「貴方がなる人物は、十常侍と呼ばれるようになる、張讓です。」

「……………」

「いや、しかし、ん？聞き間違いでは無いはずだ。確かにいま十常侍といった。やつらは…いや、考えるのをよそう。うん。落ち着こうとりあえず、逃げるか…」

恐らく、生まれて初めて焦ったかもしれない。

いつでも死ぬ覚悟はあったつもりであるのだが、予想の斜め上をいかれると人間冷静では居られないと証明した。

「…あ！ああ、大丈夫ですよ。成り代わる形ですので、男の尊厳はまもられますよ。」

「…ん。ああ、大丈夫です。きにしませんです。」

全速全力で、動揺していたが精一杯隠した！そう、隠したのだ！

「話の続きですが、張讓と成り代わり実権を握り黄巾の乱を成功させて、反董卓連合を作り其処で董卓軍と各国の力をなくして下さ

い。」

恐らくだが、それだけでは後に”王”と呼ばれる者達は止められない。

「そして、黄巾の乱では波才、反董卓連合では董卓軍として高順と成り、好きに暴れて頂き結構です。因みに黄巾の乱の核は張三姉妹ですが、彼女らに戦闘力は皆無なので、実質的な指揮・権力は貴方”波才”が持ち行動していきます。反董卓連合も董卓は善政を敷いてしまうので、”張讓”として防ぎ”高順”として連合を叩いて下さい。」

「理解はした。一つだけ質問だ」

「どうぞ」

「流石に駒がいなければ、1人で軍に対抗はできないぞ」

「そこは、大丈夫ですよ。気にしないで下さい。」

結構重要なことであるが、大丈夫だというなら詮索はしないし出来る限り自分でやれば良いだけである。

「では、初めに”張讓”として黄巾の乱を起こし、そのまま”波才”になり軍指揮をするためにこの本を。」

そう言って”太平要術”を差し出す。

「貴方ならそこに乗っている、術の2、3習得出来るでしょうから
時機がくるまでに覚えるのも良いと思いますよ」

妖術と呼ばれる物を使用できるのかと、疑問を持つが出来なくても
読むくらいしてみるかと思っていた。

「では、宜しくお願いします」

そして、戦乱を引き起こすために旅立つ。

4 (後書き)

あいやー。

色々意味不明ありそうな展開になりました。

後、物語として成り立たないけど、一刀君殺すだけなら、同陣営に入って仲良くなって殺害。

1話短編で終わる…

5 (前書き)

おかしい所が多々ありそうだ…

都、そこには帝が居て街も栄える。

しかし、都とは名ばかりで宦官と呼ばれる者たちを筆頭に権力抗争を繰り返している。

そのため街は荒れ、城では毎日のように酒宴が開かれている状態である。

近年、各地で野党も増え続ける一方であるが、都ではそれらの賊を退治する、殲滅のための兵士は送らない。送らないのではなく、送らない。興味がないというのが一番近いだろうか。

ある夜、張讓の住む宮殿近くに3つの影が話しをしていた。

1人は張讓、1人は同じ宦官の趙忠、最後の1人は兵士のような格好をしている。

「各地でも良い感じで不平不満がたまっておるようじゃな」

そう、口を開くのは張讓。それに続けるように残りの2人も同意する。

「はっ！我々”黄巾党”もあの三姉妹の集めた男どもを先導し数を増やしつつあります」

「これこれ、幾ら周りに人がいないからと言ってその名を使うではない」

兵士の言葉に趙忠が釘を刺す。

「ふむ。概ね成功しているようじゃな。三姉妹の歌に、”洗脳””拡声”の術の掛かりは抜かりないな？」

「はい！歌を聞いた連中は皆良い兵士になるでしょう。」

兵士は肯定の意を伝えるが、しかし、と続ける。

「我々が活発になると同時に、各地の山賊等による街への破壊活動が活発化してきたことにより、正義を語る太守達や義勇軍が行動を起こしております。」

張讓は考える。

黄巾を本格化させる前に賊共が活発に動いているせいで、多少の後手に回ってしまっているのではないか？

しかし、彼女達のファンが増えて来たとは言え、まだ官軍に立ち向かえる兵数でもなければ練度も違う。

まして、兵を率いる有能な将がない。前にいる兵士は中々有能で統率力も多分あるだろうし、何より身軽である。だからこそ、時が来るまでの仲介をしてもらっている。

「そろそろ、本格的に動くとするかのお…」

そう呟き、懷から書を出す。

張慢成に宛てた密書。内容としてはシンプルで、これから行動を起こす旨を伝えることである。

「大陸を黄色に染め上げてやりましょう。」

そう返事をし、消える。

「中々有能な奴のようだな」

「まだ、若いこれから伸びるだろう。確か、馬元義とかいう名前だと記憶しておる」

「波才に張慢成そして彼を中心に軍を構成させ、世を乱すか…」

「そうじゃな。官軍共も精々頑張ることじゃな」

高笑いをしながら、その場を去っていく。

その密会から数週間後、いよいよ黄巾党は本格化する。

張三姉妹を、中心として（本当は違うのだが）次々に数を増やし、各地の賊も尻馬に乗るように暴動を起こす。

時期を同じくして、張讓の耳にも暴動成功の報せ（実際には討伐令が入る）

そして、最近民達が、劉備と言われる義勇軍の元に天の御遣いが降り立つ。と噂している。

笑みを浮かべながら、時が来たことを感じ取った。これから暫くは波才になり

曹操・劉備・孫堅・袁紹・袁術・公孫讃

これから力を持つ或いは持てる力量のある勢力を削り、あわよくば再起不能に追いやってしまう。

中に馬騰や董卓がいらないのは、董卓は洛陽に呼び寄せ、同士討ちさせるつもりでいるし、馬騰は漢への忠誠心が高いので除外した。

更に言えば、涼州地方への乱はてを伸ばしていない。五胡や黄巾に触発された賊はいるのだから：

思考を戻し考える。

これらの有力な勢力にどう対応するか。各国撃破で、大軍勢で飲み込む方法もあるが、先にも考えた通り有能な武将が居らず大軍勢で攻めても統率がきかない。

そこで、一旦思考を止め、とりあえず天の御遣いの実力を図るべく劉備にあたるか：と思いい行動に移すことにする。

聞いたところによれば、幽州の公孫瓚のところに居り行動しているらしい。

なので、小手調べとしてファンの中から適当に、1万を率いて対峙することに決めた。

これから行動して最短で行く。1ヶ月かからないか：

そう言いながら、姿が”張讓”から”波才”になり、黄巾党分隊に向かう。

5（後書き）

主人公は既に張譲になってます。詳しく書こうとしたんですが、内容固まらないので省きました。

適当でも良いから書けといわれたら、閑話で挿入も検討します。

この先”も”ご都合主義で突き進む可能性があります、嫌な方は見るのやめましょう（笑）

6 (前書き)

内容が、薄い・・・？

side 一刀

今、公孫讃のところで黄巾賊を倒す手伝いという名目で厄介になっている。

これまでも、何回か討伐に行っているが、今回出現した賊は少し規模が大きいらしい。

「敵の賊は約1万、波才という男が率いているようです」

「多いな、私のところで連れて行ける兵と桃香たちが連れてきた兵を合わせて7000ってところか・・・」

「そのくらいの差は鈴々がやっつけてやるのだー」

「これ鈴々、私達だけが戦うのではないのだぞ兵士達の負担も考えんか」

「鈴々さんのいうことにも、一理あるかもしれません」

そういうのは、最近仲間になってくれた諸葛亮こと、朱里。それに続くようにホウ統こと、雛里も発言する。

「斥候さんの報告では、本隊がいる近くは森もあるそうです。数の差は私たちの策で縮められます」

「どうするの？ 雛里ちゃん」

「はい、まずは公孫讃さんと桃香様、ご主人様率いる本隊4000で相手に一当てします。そして、機を見計らい森があるところまで下がり愛紗さん・鈴々さん・趙雲さんが1000づつ率いて伏兵として敵を混乱させます。敵が混乱したら、本隊は反転して挟撃し殲滅すればいいと思いましゅ」

「しかしそれでは、本隊が危険ではないか。私か鈴々を護衛として着くことはできないのか？」

「うーんそれでは、伏兵の力が弱くなってしまうですが、鈴々ちゃんを本隊に置き伏兵は1500づつにしましょう。」

「わかった。じゃあその策を使い賊を殲滅するでしょう」

s i d e e n d

s i d e ? ? ?

私、なんか空気だった？ ここ私の城・・・だよな？

まあ、こんな優秀な軍師いないから策とかだせないしいんだけど
さ・・・

s i d e e n d

天の御使いを殺すための第一歩として顔を拝むために、黄巾1万を連れてきた。

公孫讃軍と思われる斥候も確認したから、すぐにあえるだろうがな。

3日後、奴等が現れた。

将が多いな、数の利があまりない、か。

「この軍を5000づつ、二つに分けるぞ、適当に分ける」

近くにいたやつに命令をだす。

この近くは森もあり、火計・伏兵に気をつけなくてはならない。

だが、今回は小手調べでもあるし相手の策を下手に潰して、以後警戒されるのは面倒だから負けといてやる。

精々今回は、馬鹿が集まった烏合の衆を演じてやろうじゃないか。

「5000づつに分けました」

「では、はじめは5000で敵にあたる。敵が引き始めたら残りの5000で突撃する」

一人心に誓い、軍から離れる。

次々に伏兵の矢により倒れていく駒。

まだ、逃げ出す兵は少ないが勝敗は決している。

そろそろか・・・そう思い、敵本陣に一騎で近づき天の御使いを遠目で確認する。

そして、矢を放つ。

・・・赤毛のチビに簡単に弾かれたのを確認して、その場を離れようとした。

「まてっ!!」

すごい勢いとともに、こちらに向かってくる兵がいた。
黒の長い髪をしていて、ミニスカートにニーソックス。
第一印象は、（やべっ! かわいい）
しかし、顔には全く出さず対峙する。

「わが名は、関羽! 将と見受けるが兵を置いて逃げるのか! 悪いが、ここで死んでいただく」

「わが名は、波才。死ぬ? 面白い。この体でどれくらい戦えるか試させてもらおうか」

お互い名乗りをし、先に動くのは関羽。突きから薙ぎ払いの連打をくりだす。

「ぐっ・・・」

3合も合わせぬうちに、体に裂傷をつくる。

関羽の攻撃は早く、重い。まだ体が慣れていないこともあり、かなり劣性である。

一撃目を交差させた瞬間に力の差は理解したので、逃げの一手をずっと考えていた。

とうとう、武器を弾かれる。しかし、ここで関羽が油断をした。

油断といっても、勝ち負けの油断ではなく勝ちを確信して少し大振りになっただけであるが・・・

だが、これを見逃さずに懷から短刀を関羽の偃月刀目掛け投擲し弾くそして、一目散に逃げ出す。

後ろから、関羽が何かを言っているが無視してその場を離れる。

天の御使いに武はなかったが、まわりの赤毛や関羽は厄介である。しかし、顔は覚えた。次は、黄巾党本隊で会いまみえるのでしょうか。

張慢成・馬元義を呼び寄せ黄巾党本隊約20万を集結させる密書を用意し、しっかり届く書と連合にわざと見つかる書にわけて各地にとばし、一人策を考えていく。

6 (後書き)

この先どうしよう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4979s/>

真・悪役†無双

2011年10月8日08時03分発行